
Break!!

黒亜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Break!!

【ZPDF】

Z4093BA

【作者名】

黒畠

【あらすじ】

多才な男、篠崎仁。

彼には秘密があつた。

そして、それは新たな脅威を呼び寄せる。とにかく好き勝手に生きる男の物語。

様々な世界をBreakしろ！

本当に滅茶苦茶な作品です。

計画性もなければ、明確な終わりもなし。

楽しめる方だけどうぞ。

となる未来のワシシーン、つまらぬプロローグ（前書き）

なんというか、自分が好きで適当に書いてる
作品なので、クオリティーは酷いです。

これに関しては、もう前作の比じやなく。

活動報告に詳しい注意というか説明も書きますが…

そんな暴走（笑）を許せる人だけ読んでください。

とある未来のワンシーン、つまりはプロローグ

静かな夜だった。

月の光が照らすのは目の前の惨状。

おそらく最悪のファーストコンタクト。

出会いが最悪なら、交わす言葉も。

「

」

俺の目の前に現れた存在。

その出会いは偶然か、必然か。

その存在は俺の日常を大きく揺るがす。
そして、変化していく。

何故こんなにもかき乱されるのだろうか。

それは出会ったものが“異質”だったから。

でも、それだけじゃない。

相手の“異質”は明らかなのに、そう言いきれる。
自分でも不思議な感覚、だがそれは確信だったのだ。
どうしてだろう。

ああ、そうか。

俺が“異質”だからだ。

となる未来のワンシーン、つまらぬプロローグ（後書き）

ありがとうございました。

このプロローグが後々の主軸なんですが…まだ先ですね。
また、主人公以外にもオリジナルキャラを
予定していますがいつになることでしょう。

適当な男、でもこれ主人公なんだ（前書き）

計画性が皆無なんで、
どう転がるかは自分も分かりません。
『気楽』に見てください。

適当な男、でもこれ主人公なんだ

あなたは篠崎^{しのざき}「わんの」^{わんの}ことをどう思いますか？

1年生男子のAさん。

「篠崎先輩ですか？やっぱ、男らしくて尊敬したりやいますね。男から見てもかつこいい人つていうんですか？憧れちゃいますね。」

3年生女子のEさん。

「篠崎くんね…なんていうか、不思議な感じ、掴みどころがないっていうんだらうけど、なんか魅力的つていうか。好きな人もいるんじゃないかな。…え？ 私？わ、私は違うよ！」

2年生男子のUさん。

「ん？篠崎か。あいつは結構頼れる奴だよ。女子にもモテるはずなのに面白い奴だから、調子乗ってるバカとかと違つてムカつかないしな。」

1年生女子のYさん。

「篠崎先輩つて…あ、分かります。なんかちょっと怖い印象があります。有名な人で色んな噂を聞くので、勿論良いものもあるんですけど…。なんか凄すぎで住む世界が違いますよね。」

人によつて、意見は様々ですね。

しかし、全体的にはやはり好意的な意見が多く見受けられます。さすが学園の有名人といったところででしょうか。

謎多き人物、まだまだ調べ甲斐がありますね。

以上、新聞部でした。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

ここは聖クロニカ学園高等部。

キリスト教の精神に則つたミッションスクールである。学年が1つあがり、この新生2年5組も大分なじんできた。まあ1ヶ月かそこいらあれば、こんなものだろう。

「おっす、篠崎ー。」

「おっす。」

「おはよ、篠崎くん。」

「ああ、おはよ。」

「いつも登校早いよなー。」

「俺より早く着いてる奴が言つなよ。」

「ははっ、確かに。」

朝、登校していつも通りにクラスの皆と挨拶をかわす。そこに男女や個人での区別は作らない。声をかけられれば、1人1人に返していく。

「1時間目なんだっけ?」

近くにいた女子に聞く。

「数学だよー…って、篠崎くんがそんなこと聞いて意味あるの~?」

可笑しそうに笑われながらそう答えてくれる。

決して彼女が失礼とかではなく、当然笑われる原因が俺にあるのだ。
うん、でももう笑うのやめてもいいんじゃないかな。

「一応、参考にと頃つてや。」

「篠崎くん、こいつもまたまだ授業受けてないよなー。今日は何するつもりなの?」

別の女子も話題に入つてやる。

とこつが、もうなんだよな。

俺は授業をやぼつて、何かじり皿田にせつてこる。

睡眠をとることもあったが、基本はそのとき止まつてこることをやめやが。

「今日はポスター描くつもつ。」

「ポスター?」

「ああ、なんか節電をテーマに募集しててさ。採用されたら、色々もらえるらしいから。

お金とか……現金とかね。」

「結局、お金しか覚えてないんだ……。」

「篠崎くん、絵も上手いしね。節電かー、ベタに蠟燭をおこてる家庭の絵とか?」

「いや、それじゃ採用されない。ちょっとひねつて、イナゴの大群とか描いてみよう。」

「ひねりすぎだよー。もつ何を表したいのかも分からないよー。」

「篠崎くんが描いたのを想像したらぞわつとしたよ…リアルすぎる。」

「

絵の上手さを褒められて、悪い気はしないな。
うんうん。

「なんか得意な顔してるけど、絶対間違った解釈してるよね。」

都合の悪いことは全て聞き流す俺だった。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「では、授業を始めますよ。教科書24ページを開いてください。」

うーん、イナゴは「冗談にしてもインパクトが欲しいよな…。
ペンで」めかみをつつきながら、思考を巡らせた。

「それで」の問題はですね…、あのー篠崎くん。」

街が暗くなつて見える星空とかもあつたりかな。
いや、表現次第じゃ化けるか？
そこは俺の腕の見せ所か…

「ちよつと篠崎くん！」

「あ？」

「ひーーー！」めんなさい、「めんなれー。ちよつと先生調子のつてま
した、どうぞ作業をお
続けくださいー！」

「いや、ちよつと…」

「ああ、お願いだから許してー。」

「先生、篠崎くんを怖がりすぎー。」

ちよつと笑いに包まれる教室内。

授業も少しの間、中断せざるをえない。

当然、その後も授業がすんなり進むわけもなく、終わりのチャイム
が鳴つてしまつた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「何をどうしたらいつなるんだよ…」

放課後になり、俺の周りには何人かの男子が集まっていた。
皆の目は俺の机の上、正確にはそこにあるポスターに向かっている。

「もう風景画つていづレベルじゃね?」

「俺、これが写真だつて言われたら信じるわ。」

「そりゃ言つあがだる、けど凄いよな。」

街の明かりが作り上げる地上の星空と、それがなくなつて見つけられる本当の星空。

そんなことをモチーフに描いてみたら、案外つけがいい。

「まあ、入選確定だ。」

「ほんと自信過剰とか言えねーもんな…」

「あと、もう行くか。」

俺はそつと立ち上がる。

「お、今日ははどうしたの？部活か、バイトか？」

「今日は部活だよ。」

「ははっ、部活ね…頑張れよー。」

「ああ、じゃあな。」

俺はそうして礼拝堂の方へ向かった。

適当な男、でもこれ主人公なんだ（後書き）

ありがとうございました。

なんかもう一つの作品と終わり方が
デジャブつてるような…

でも次からは全然違うので、はい。

放課後は人助け（前書き）

はがないとかのキャラが出てくるのは
もう少し先になります。
とりあえず、主人公紹介を兼ねて
だらだら日常を書きます。

放課後は人助け

「今日も部活やるやーーー！」

部室のドアを開けて言い放つ。

よく響き渡つたが、それだけだった。
まあ、部員俺だけだしね。

所属、篠崎仁一 名のみ。

それがこの“救世部”だ。

勿論、発案者、設立者、部長も全て俺。

顧問は流石に教師に頼んでいるが、今日はいなじょうだ。

さて、この部活が何をやるか知りたいだろう。
名前で分かるとか、興味ないとかいう意見はスルーだ。
この部は主に悩み相談、個人的な依頼など、とにかくどんなことでも困っている人を助け
ることが目的だ。

まあ、要は何でも屋みたいなもんだ。

“救世部”なんて大層な名前はミッションスクールといつこの学校
の特徴に合わせたまで。

無理矢理にでも宗教的に関連付けてしまえば、基本緩い。
でなければ、部員1人の部活なんて認められるわけがなかつた。

「つと。」

カバンをそこいらに放り投げ、自分専用の席に座る。

だが、この部活は俺がいるだけでは始まらない。

こ」「生徒相談室”に客が来ない」とには活動ができないってわけだ。

これまでに受けってきた仕事つていつも沢山ある。
些細なことからでかいことまで。

そうだな、例えば…

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

コンコン

ドアがノックされる。

んー、ノックするつてことは後輩か女子生徒の可能性が高いな。

「どうぞー。」

「すみません、失礼します。あの、ここのこと友達に聞いて、それで…！」

「ああ、焦らないで。話は聞くから、とりあえずそこに座つてくれ

る。」

「はー。」

「一年生だよねー。」

「はい、そうです。」

話しながら、来客用の椅子に腰掛けもらひ。

「ミルクティーとか大丈夫かな?」

「あ、はい。好きです。」

「じゃ、これ入れたから飲んでね。」

「…ありがとうございます。」

「初めてだと妙に畏まっちゃう人がいるから、リラックスしてな。
ここは誰でも気兼ねなく他では相談できないことも聞いてあげると」だからさ。」

「はい。」

「で、何かな?」

まあ、なんか様子を見れば予想がつかなくもないが、一応聞かなきや分からん。

「あの、実は私好きな人がいるんですけど…」

「へえ、いいね。」

やつぱりこの年頃の女の子はやつだよな。
予想通りだ。

「それで告白をする勇気もなくて、でもやつぱ人には相談しづらい
ことなので…。そのと
き友達に聞いたら、ここなら力になってくれるって言つて。」

「いいよ、詳しく聞かせてみな。」

空になつたカップにミルクティーをつぎながら、話しかける。

「あ…はい。あの同じクラスの前の席の人なんですけど、よく話し
かけてきてくれて私の
話も聞いてくれるので気になつてきて。」

「ふーん、じゃあ顔とかが好みつてことじゃないのかな?」

「そうですね、話してたら自然と意識しちゃつてあんまり外見とか
は気にしてません。」

「そつかそつか。」

「でも、私このううこと初めてなのでどうしていいか分からなくて

…

「そつか、何かするにはどうしたりいこつていつよつ、何すればいいか分かんないのか。」

「…はい。」

「とりあえず、告白とかは恥ずかしい感じかな。」

「すみません。」

「謝る必要はないつて、それが普通だからね。今日は時間大丈夫？」

「え、あ、はい。」

「じゃあ、ゆつくつ考えてこいつか。大切なことだしね。」

「あ、ありがとうございます…。」

「自分の目的は仲を進展させることだよな…連絡先とかは知つてるの？」

「はい、メールアドレスとかは話してないか？」

「好きなタイプとかは分かる？」

「それはちょっと…」

「まあ、こきなりそつこつ話題にはならないか…。でも君可愛いし、相当変わった趣味じ

やなければ告白されたら落ちつかうと思ひナビね。」

「えーか、可愛いつて私がですか？」

「うふ、可愛いよ。だから成功させるために一緒に頑張りつね。」

「……う。あ、あのー今日はもう帰ります。」

「え、でもまだ悩み相談が…」

「いいんです。もう少し考えてみます。本当にその人が好きかよく分からなくなっちゃい

ました。だから、今日は…！」

バタバタと焦つて荷物をまとめ始める。よく分からぬが、あまりしつこいのも駄目だ。

「分かった。じゃあまた何があつたらおいで。気をつけて帰りな。」

「は、はい。失礼します／／／

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

そんな感じで恋の悩みも解決したりしたからな。まあ、なんか中途半端な結果だったけどさ。

最後の方はよく分からなこまま帰つちやつたし、上手へこつてればいいけど。

「ふう。」

回想してたら手元のノーノーがなくなつていた。
とにかくこの部活は恋愛相談でもなんでもどんなことでも解決する
つてことだ。
またに何でもこいつてことだな。

ノーノー

不意に足音が聞こえてくる。
どうやら、客が来たようだ。
今日はどうなことが持ち込まれるのやい。

放課後は人助け（後書き）

ありがとうございました。

恋愛相談に来たはずが…

こんなケース一度じやありません。

誰だつて描かれたものもある（前書き）

今回はキャラ紹介も書こうと思つてますが、まだオリキャラが出来ていないので、それまでは断片的に知つていいください。

誰だつて苦手なものはある

外から足音が聞こえてくる。

今日初のお客様だ。

何でももつてきやがれ。

「おこ、篠崎一。」の宿題もつてくんね?」

「・・・・・・・・

机の上に置かれるノートと参考書。
うん、あれだな。

「俺に任せろーーー。」

「で、なんでその宿題を私のところに持つてくるのかな。」

「なんかすいません。」

急遽持ち込まれた最高難度の依頼。

俺はそれを解決すべく図書室に足を運んでいた。

そこでいつも勉強している3年の灰島先輩、成績もいつも上位のま
ううう。

「いつも持つてくれるけど、篠崎くん勉強が苦手なんですよ。」

「だから、勉強の出来る先輩に頼んでるわけですよ。」

「あんまりじゃないが、俺は勉強だけはてんで駄目だ。
まあ、得手不得手があるのは当たり前だよな。
こういう無理な依頼は今までにもいくつかあったので、全て先輩に
協力してもらっている
というわけだ。」

「君の場合、授業を真面目に受けてないだけじゃが。」

「だつて他のことやつてるほうが楽しいんだですよ。」

「なら、じつは受けなきゃいいじゃない。」

「いや、でも困っている人がいるわけですね。」

「こんなのは持つてこられて、今までに私が困ってるんだけど……。」

「そういうながらもやつてくれる優しい先輩が大好きです。」

「ちよ、ちよっと、もう…そういうこと軽く言わないでよねー。」

「ほんとに好きですほん、先輩のこと。」

「……するこわね。」

「いつもこんな感じで引を取ってくれる優しい先輩でした。

先輩がやつてくれている間は俺も近くの席に座つている。雑談しながらでも灰島先輩の手は止まることがないので、俺も話しつぶやく暇を潰す。

それも迷惑がる様子なく受け答えしてくれる先輩はやはり良い人だ。

「篠崎くんって結構色々こいつのやついるよねー。」

「まあ、そうですね。」

「でも報酬とかもらつてるわけじゃないんでしょ?」

「ていうか、そんなことしたら密来なくなりますから。」

「セレはちゃんと分かってるのね。」

「それに俺は俺で楽しんできますし。」

色々と理由はあるが、実際退屈しきはなつている。

「まあ人に良いことしてれば、自分にも返ってくるって言うけどね。

L

「結局、自分のためですか？」

「それなら自分で頑張つて欲しいわね。はい、終わり。」

「ありがとう、先輩。」

「もう持つてこないでよね。」

「」のお礼は今度また一緒にどうかデートするともにでも。」

「ぶつ」

「じゃあまた。」

突然賣き出しだした。女講のザーフ用意を出だす。

あのあと、見事に出来上がった宿題を依頼人に渡して、無事完了。今日の活動も終わって、下校している途中だ。

「あれ？」

ここから少し離れているが、柄の悪い男3人がおばあさんを囲んでいる。

ああ、あれだな。

「おい。」

近くに移動し、声をかける。

「あ、篠崎さん！」

「お疲れ様っす、いきなりビリしたんすか？」

「いや、見かけたから声かけよつと思つてしま。道でも教えてあげてたのか？」

「あ、はい。このばあさんが迷つてしまつたんで。」

「んじゃ、俺が送つてくれるわ。」

数分後…

「で、あれからビリだ？」

「はい、篠崎さんの教えを守って頑張つてゐます。」

「こいつら3人は前は普通のヤンキーでウチの生徒にかつあげをしていたりしたので、その

被害者が俺に依頼をしてきた。

そのことを話にいくと襲い掛かつてきただので、対処したといつわくだ。

そのときからどうやら改心したらしい。

ちなみにこいつらが言つてゐる教えといつのは……

（

一斉に向かつてきただ3人を一瞬で片付ける。

「なんだこいつ、めちゃくちゃつええ……」

「これに懲りいたらウチの生徒からはかつあげすんのやめときな。」

「くつ……」

「別にお前らが何をするかは勝手だ。ただ男だつたら、かつこいい

生き方しな。何をかつ

こよく思つかは自由だけど、俺は無抵抗の奴を追いつめんのは好かねえな。」

「うつせり、あの説教もじきを教えとか思い込んでるうじー。
まあ、いいけどな。

「篠崎さん、また会えるなんて感激つすよ。」

「別にセレモニでじやないだろ。」

そのあと適当に雑談を切り上げて、帰路についた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「ただいま。」

家に着いたときのお決まりの台詞。

だが、そこに“おかえり”の言葉は続かない。
何年も前からそれは変わらないことで。

棚に立てられた写真に向ける。

そこには見慣れているけど、もう一度と見られない笑顔がある。

「…ただいま。」

首もとのペンダントを握り締める。
高級感なんて全くないただのひもに透明な石がぶらさがっているも
の。

冷たくても確かに温もりを感じる。

「さてと、バイト行きますか！」

誰だつて苦手なものはある（後書き）

ありがとうございました。

ちょこちょこ主人公の情報を出していっていますね。
前作のように謎で引っ張らないので

そこはご安心を。

あと、今話の登場キャラで何か気づいた人は鋭い。

嫌われ者で人気者（前書き）

早くはがいやバトルを書きたいです。
しかし、この前置きも結構
大切な仕方ありません。

嫌われ者で人気者

次の日も授業が終わればすぐに部活である。

いつものように生徒相談室に向かうが、ドアの前に人がいた。知り合いではないと思うのだが、こんな早くから密か？

「I.I.Iに用？」

「篠崎先輩ですね。私、部活調査という1年生の授業の一環でこの救世部を担当することになりました。今日一日見学をさせてもらっています。」

「じゃあ、とりあえず入りなよ。」

「ああ、そんな話されたっけな…。」

「…されてないな、でも嘘じやないだろ？。」

「適当にかけていいからね。」

「失礼します。」

「失礼します。」

そのまま立っていたので、椅子に座るよつて言ひ。で、最初つから気になつてることを聞こひ。

「なんでそんなに不機嫌なのかな。」

そう彼女は終始すつとしていて、言葉も早口だった。

「はづれぐじを引いたからです。こんな小さい部活まで対象になつているなん

て。」

「それは…まあそつか。」

「それに私は篠崎先輩もあまり良く思つてません。先輩については評判のいい

噂もお聞きしますが、不良グループの溜まり場の学校に乗り込んで潰したとか

いう話も聞きますし、正直野蛮だと思います。」

あー、またこれか。

俺は部活で色々な依頼を受けてきた。

中には 高校の奴らに大事なものをとられたから取り返して欲しいといひの ある。

実際にそういうことは何度があるが、噂には尾ひれがつくものだ。

今のは話だつて、俺は話し合いに行つただけでほほ全校生徒で襲い掛かってきた

のはあちらなのだが、それを倒してしまつた俺がどう言おうと無駄

だろう。

そんな噂もあるせいで一部の先生からは怖がられていたりする。数学の新人の先生とか特に怯え方が半端ないもんな。けど、仕方ないことだ。

「気の毒だけど、今日一口我慢してくれな。」

「あ、はー。」

（ハハあつ血こ返してへると思つたのに…）

「てこうちか、密来るまでは基本暇だから。」の部活。

「そうですか…」

「これでも食つてな。」

「なんですか、これ。」

「何つてサンドイッチだけ知らなー?」

「いえ、そういうことではなく。なんですか。」

「だってすることないでしょ。紅茶と一緒にティータイムつてこと

で。」

「はあ… いただきます。」

遠慮するかと思つたが、意外にもすんなり受け入れてくれた。サンドイッチを手に持ち、一口食べる。

「あ…美味しい。」

「それなら良かつた。」

「でも、これ食べたことない味…。どこに売ってるんですか?」

「いや、俺が作ったんだよ。オリジナルソースだから。」

「えつ…これ先輩が…、もういりません!」

「別に気にすんなよ。確かに俺のことは嫌かもだけど、それが美味しいのは食材のおかげなんだからさ。」

「……なら、食べます。」

ふてくされたような顔をしながら、またサンドイッチを手に取り直す。

その後は止まることがなく、美味しいと食べててくれたのだった。

「…誰も来ませんね。」

「まあ、いついつ日もあるから。」

「やつあからり向やつてるんですか?」

「ゲームだよ、ゲーム。」

後ろから画面を覗き込まれる。

「なんですか、これ…。女の子が出てきて…」

「恋愛ゲームつてやつだよ。」

「先輩、そんなのやるんですか。」

「好きなんだよ、これだけじゃなく他のもまとこじやつてました。」

「なんか、本当にイメージが変わりました。」

「それは良いことなのか?」

「…やう。」

眞葉は素つ氣なかつたが、最初のよつな敵意はなかつた。

「すみません、失礼します。」

やつして適当に時間を潰して過りこむと、やつと密の来訪だ。

見た感じ、どつかの運動部の一年男子ってとか。

「篠崎先輩、これから練習試合なんんですけど助つ人に入ってくれませんか？」

「何部だ？」

「サッカー部です。一年対一年の試合でこちらは1人誰でも助つ人を呼んでいいと言わされたので、運動神経がいいと評判の篠崎先輩に。」

「よし、分かった。すぐに行こう。」

「ありがとうございます！」

早速外に出ようとして、一度振り返る。

「どうする、来るか？」

「一応見学ですから。付いていきます。」

そうして、後輩も連れてサッカー部へ向かった。

グラウンドには他の部員が集まつていて、もう試合を始める準備はしているらしい。

「おー、やつと来たか…つて！？まさか篠崎が助つ人かよ。」

「よろしくー。」

「誰でもいいとは言つたけどよ。」いつが来ると…

言い終わる前にまわりから声が聞こえてくる。

「ねえねえ、篠崎くんがサッカーの試合出るらしいよ。」

「え、絶対見に行かなきゃじやん。」

「今から始まるつてや。」

「わあー、頑張つてー！」

そんな様子を端で見学していくる後輩は見ていた。

（本当に人気あるんだな、先輩。）

だが、盛り上がるまわりとは裏腹に篠崎と対戦しなければならない
二年生たち
は真剣だ。

キヤブテンがチームメイトに喝を入れる。

「おい、気合い入れるよ。絶対引き分けで終わらすぞ。」

「え、引き分け？」

「あー、お前篠崎と試合したことないのか。あいつがシユートを打つのは俺らが得点した分だけだ。だから、アシストで入れられなによいにして引き分けにするのが、俺たちの最高の目標だ。」

「そんな……絶対カウンターってわけじゃないんだし、大げさな。」

「……やればすぐに理解できる。」

キヤブテンは口で言つても無駄だと考へ、口をつぐんだ。

「じゃあ、始めよう。」

2年生たちは1年生相手の練習試合とは思えない真剣さ。試合開始のホイッスルが鳴つた。

嫌われ者で人気者（後書き）

ありがとうございました。
次回くらいでちょっと主人公の
力を書けるといいですねー。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4093ba/>

Break!!

2012年1月14日15時51分発行